

イエスはまた群衆にも言われた。「あなたがたは、雲が西に出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。また、南風が吹くと、『暑くなる』と言う。事実そうなる。偽善者よ、このように地や空の模様を見定めることは知っているのに、どうして、今の時を見定めることができないのか。」（ルカ12：54～56）

主イエスは、西に雲が出るとにわか雨になる、南風が吹くと暑くなると、天気や気候を見定めることができるのに、どうして、今の時を見定めることができないのかと言われた。主イエスの言葉と業が受け止められない、時代の不信仰を嘆いた言葉である。

「今の時を見定めることができない」という言葉から、マタイ福音書23章の偽善な律法学者たちを弾劾した主イエスの言葉を連想する。「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたがた偽善者に災いあれ。あなたがたは預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりしている。そして、『もし先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流す側には付かなかつたであろう』などと言う（マタイ23：29～30）。」旧約聖書の預言者は、人間の罪を告発し、悔い改めて神への信仰に生きよと語った。民衆は、預言者の言葉を受け入れず、迫害を加え、死へと追いやった。今、律法学者やファリサイ派の人々は、預言者の墓を建て、信仰を証した正しい人の記念碑を飾り立て、自分が預言者の時代に生きていたら、彼らを迫害したり、血を流させる殉教などはさせなかったと言い張る。過去の真実を理解し、敬意を払っていると、自らの信仰深さを公言している。ところが今、主イエスが現わしておられる神の愛と真実には耳を貸さず、目を止めず、殺そうと企んでいる。過去は見えるが、今の主イエスが見えない。今の時を見定められないのである。

パウロはキリスト教界の中で、最も、宣教に励んだ人である。パウロの活躍によって、キリスト教は異邦人の世界へと広がった。このパウロ評価は、今や、揺らぐことはない。ところが、肉を持って生きていたパウロは受け入れられず、散々な評価を受けていた。

パウロが語る福音が、頑迷なユダヤ教徒に反発されたのは理解できるが、コリント教会では、クリスチャン、しかも、パウロが宣教したクリスチャンから大きな反感を受けている。コリント教会のある人々は、パウロの過去を問題にし、底辺に立って宣教するパウロを批判した。パウロに対し、彼はペトロのような使徒とは違い、主イエスに直接教えを受けていない、また、かつてはクリスチャンを迫害していたとか、更に、卑しい仕事のテント造りをしながら宣教していると、パウロを軽蔑する風潮もあった。今のパウロの真実が見えなかった。パウロにおいても「今の時を見定められなかった」のである。

今日の視点から見れば、パウロの女性観は批判されよう。パウロは「すべての男の頭はキリストであり、女の頭は男であり、キリストの頭は神であるということです（Iコリント11：3）」と、神→キリスト→男→女の序列で捉えている。また、「女は教会では黙っていなさい。女には、語る事が許されていません（Iコリント14：34）」と、教会での女性の発言は認められていないと語っている。パウロも女性に関しては、時代の価値観を踏襲していたということである。しかし、主イエスの福音を全身で受け止め、狂気のような激しさで宣教したことに異論はない。その私たちは、今が見えているか。見えていない。主イエスの言葉を聞き、業を見て、福音の光に照らされ、「愚かで、罪深い僕を憐れみ、お赦してください」という祈りの中で、真実が見えてくるのではないか。